

実習段階に応じた学生指導の方法に関する一考察

－第一・第二段階実習を比較して－

伊藤 健次

要 約

本研究では、介護実習Ⅱ（本学2度目の介護実習）を初年度と比較する形で分析と考察を行った。第一・第二段階実習後に実施したグループインタビューの比較分析と質問紙調査の結果、ケアプランを作成・実施するという目標が実習全体に大きく影響し、明確な意図を持った実習を試みていることが示唆された。また、第一段階実習、第二段階実習それぞれの実習段階に応じた学生指導の方法が示唆された。

キーワード：介護実習 実習段階 実習指導 リアリティショック

1. 緒言

本研究では昨年度（平成18年度）に実施した介護実習Ⅰ（＝第一段階実習）に関する調査結果¹⁾をふまえて、初めての実習から一年間という期間を経て二度目の実習である介護実習Ⅱ（＝第二段階実習）に赴いた学生たちの様相を分析し、考察を行う。介護実習Ⅱは三年の前期という時期に4週間にわたって実施された実習である。本学介護課程の学生たちにとってこの3年前期という時期は、介護実習→前期試験→介護実習報告書作成→夏期休暇中の社会福祉士実習（4週間）と思つくなもなく進行し、後期にはいるとゼミ、卒論指導がスタートする大変忙しい学年といえる。大学生活も折り返し点を過ぎ、比較的ゆっくりと過ごしてきた大学生活の前半から、様々な実習、卒論準備、国家試験対策、就職活動など、卒業や就職を意識する機会が増え、将来に関わる選択や準備を本格化させる「変化」の始まりとなる時期である。また、実習そのものの内容も体験的な要素が強く、介護を学ぶというよりも人との接し方や関わり方に主眼が置かれていた実習Ⅰと比較して、アセスメントやケアプラン作成などの専門職としての知識と技術の活用や、自ら介護技術を実施する機会も増える実習である。知識や技術をひたすら習得

していく段階から、それらを統合し活用することが求められる段階へと進んだ学生たちが、前回の実習と比較して今回の実習をどのように捉えたのか、実習直後の質問紙調査とグループインタビューとをその変化に注目して分析し、考察する。

従来の介護実習に関する研究においては、介護技術やコミュニケーション技術等の技術水準の変化を取り上げたものが殆どであり、実習そのものへの取り組み方に関する継続的な調査は見受けられない。また、本学は開学3年目と歴史が浅く介護実習への取り組みも緒に就いたばかりであり、実習指導を一つ一つ積み上げていく必要がある。そこで、本研究は学生が直面した実習場面を継続的に調査し、今後の本学の実習過程をより充実させるための基礎的データを蓄積し、各段階に応じた指導方法を見いだすために実施する。

2. 用語の定義と介護実習Ⅱ概要

2. 1 用語の定義

本研究におけるリアリティショックの定義：介護実習中にうけた、実習を行う前に思い描いていたこととのズレ、違和感、ショックに感じたこと、自分の理想との相違、などにより生じる様々な学生の反応

(所 属)

1) 山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科

2. 2 介護実習IIの概要

図1 介護実習II概要

実習期間	2007年6月4日～8日、 6月18日～7月6日 計20日間 ※実習先の都合により、6月4日～29日 というグループもあり
実習までの流れ	2006年 11月 実習先希望調査 2007年 2月 実習配属先決定 4月～ 介護実習指導II：ケアプラン作成演習・実習計画書作成指導 5月 オリエンテーション実習（1日） 実習計画修正 6月 4～8日 第一期：担当利用者決定 6月 11～15日 帰校期間：グループ学習 6月 18日～7月 6日 第二期：アセスメント・ケアプラン作成・実施
実習配属先種別	特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、身体障害者療護施設、重症心身障害児施設、救護施設、身体障害者授産施設 前年度の介護実習Iにおいては全員が特別養護老人ホームで実習を行ったが、介護実習IIにおいては学生の希望調査を行い、受け入れ定員を越えた場合のみ調整を行い、原則的に学生の希望に添う形で配属先を決定
実習目標	①介護現場を知る ②基本的な生活援助技術を身に付ける ③一人の利用者について介護課程の展開を体験する ④介護関係を通して人をみつめそこから得たものを文章化する このほか、学生各自の個人目標を設定し、各自の実習計画書を作成
履修学生	介護福祉課程に在籍する3年生（20名）
実習までの履修状況等	介護技術演習I～III：日常生活援助のためのコミュニケーション技術、介護技術などの基礎的な教育が終了

3. 調査

3. 1 介護実習II終了後のグループインタビュー

3. 1. 1 実施概要

目的：学生が実習で感じたり直面したりした様々な「現実」（=実習前に思い描いていたこととのギャップ、違和感、ショックに感じたこと、自分の理想とのズレなど）を表出し、学生自身の生の言葉を記録化することを目的とした。

対象：「介護実習II」を実施した山梨県立大学介護福祉課程に在籍する3年生（20名）のうち、グループインタビューへの参加を表明した17名（男性2名 女性15名）

調査方法：学生相互の自由な表出を阻害しないよう、同席教員はテーマの提示（図2）のみを行い、原則として会話には参加しなかった。インタビュー時間は90分であった。

調査時期：実習終了から10日後

倫理上の配慮：グループインタビューへの参加依頼文書を介護福祉課程在籍者全員に配布し、グループインタビューの目的、意図、プライバシーへの配慮、インタビュー内容は録音するが個人名は特定されないこと、不参加でも不利益は一切ないこと等を明示したうえで参加承諾書（参加を希望しない場合は非承諾書）の提出を受けた。データの逐語化にあたっては番号表記で取り扱い、会話中の個人や施設名が特定できる部分に関しては○○さん、A施設、などの表記に改めた。

分析方法：インタビュー内容の録音から逐語録を作成し、質問項目毎の分析および、インタビュー全体から抽出したキーワードをKJ法に基づいて分析を行った。

図2 グループインタビューにおけるテーマ

- 1) 実習において最も辛かったこと
- 2) 実習中に出会った最もショッキングな出来事について
- 3) 実習中に感じた違和感について
- 4) 実習全体で最も苦労したことについて
- 5) 実習前に想像していたよりもよかったです

3. 1. 2 グループインタビュー結果

1) 実習において最も辛かったこと

図3の5つのカテゴリが見いだされた。実習Iにおいては「実習生としての立ち位置」に関する内容が圧倒的に多く表出されていて、次いでコミュニケーション能力を中心とする「実践力不足」が表出されていたが、今回は以下の①～③に関する表出がほぼ同程度に表出され、ケアプラン作成のためのアセスメントを行う過程で利用者と意識的に向き合い、アセスメントのための意図を持ったコミュニケーションを試みた形跡がうかがえる。前回同様自分のコミュニケーションに関する表出が多いが、その示す内容は情報が得られずアセスメントが出来ない等、不特定多数の利用者との円滑な日常会話というよりも援助者としての意図的な、目的をもったコミュニケーションに関する内容が増加している。また、利用者との関わりが深まっている一方で職員の目を気にする様子も表現され、自分の援助場面が職員からみてどう写るか気になるようである。また、1ヶ月の長期にわたる実習であるため交通費などの支出がかさむ一方で実習期

間中はアルバイトが出来ないなどの面や、重症心身障害児施設などのように介護福祉士がいない職場で実習することの戸惑いも新たに表出されているのが特徴的である。

2) 実習中に出会った最もショッキングな出来事について

図4の5つのカテゴリが見いだされた。実習Iにおいては職員の言動と職員が提供するケアの内容に関する事柄の表出が多く、実習生が職員を通して施設の実情を感じ取っていることが示唆されたが、今回は利用者との関係が大多数を占め、職員に関する表出は減少した。利用者に関する表出内容も、入所者の身体などの外見的な点や認知症の方の言動などに関する驚きやとまどいが主であった前回に比べて、より直接的に利用者と接した結果、実習先で行われているケアの様々な細かい点にまで目が届き、よりリアルな内容が表出されている。職員というフィルター越しに見ていた前回実習から、自分が直接深く関わり見つめた結果のあらわれと考えられる。

図3 実習において最も辛かったこと

カテゴリ	主な発言内容
①利用者との関わり	「利用者に死にたい、殺してくれといわれた」 「話しかけても反応がない時どう話を進めればいいのか分からぬ」 「会話が成立しない」 「会話が成り立たない時とか言っても反応が返ってこない時にどうしたらいいか、ああどうしたらいいの？みたいな感じだった」 「反応がない時にどう展開していくか、つなぎ直していいのかっていうところが辛かった」
②実習生としての立ち位置	「実習担当者がいないと何をしていいかわからない」 「仕事を与えられていない時に何をするべきか」 「自分から関わらないとスタッフからなにもアクションがない」 「利用者から頼まれ事をされた時に職員の許可をとらなくてはいけない」
③職員との関わり	「評価が気になる」 「職員の目が気になって会話しにくい」 「スタッフの見ている前で利用者とコミュニケーションをとるのが恥ずかしい」
④実習環境	「実習先に介護福祉士がいない」 「実習期間中バイトが出来ない」 「交通費の出費」
⑤実習内容	「期間内にケアプランをたてること」

図4 最もショッキングな出来事

カテゴリ	主な発言内容
①利用者との関わり	「利用者からセクハラをうけた」 「トイレ介助の際に必ず指名された」 「担当利用者の状態悪化」 「自分の言動で利用者が不穏になった」 「自分が利用者をコントロールしようとしている事に気が付いたこと」 「利用者の人格が豹変した」 「利用者の家族が知り合いだった」
②利用者への介助実施	「自分が介助していた利用者が入院」 「自分がオムツ交換した後利用者が失禁」
③利用者の状況	「胃ろうを自己抜去」 「ガーゼを食べてしまった」 「処置やケアの際の痛そうな顔・声」
④ケアの手法	「拘束の実施」 「異性への介助」 「排尿後に拭かない」
⑤職員の対応方法	「きびしいしつけ」 「食事を口に押し込む」 「疥癬の症状を見落とした」

3) 実習中に感じた違和感について

図5の「理想との差」という大カテゴリと、4つのサブカテゴリが見いだされた。「施設内での人間関係」や「自分の感覚とのズレ」に関する表出はほとんどなされず、「ケアのやり方に関して」の項目も自分の理想（重視したい具体的な内容）と比べる形での表出がなされ、より具体的に利用者を個別化して捉える表出が行わ

れている等、前回と比較して大きく表現内容が変化した。また、前回調査では「ショッキングな出来事」の項目で表出されていた内容が、「違和感」の項目で多く語られている。これは目の前で起こっている出来事に対してただ単に「ショック」を受けている状態から、自分が理想とする状態と、上手く表現できないが「違う」ことを感じ取っている表出であると想像される。

図5 実習中に感じた違和感

カテゴリ	主な発言内容
1：理想との差	①ケアの内容 「口腔ケアがあまり行われていない」 「一日座りっぱなし」 「レクレーションが行われていない」 「その人に合ったレクレーションが行われていない」
	②職員の対応 「泣いている子への対応」 「愛称等での呼びかけ」
	③組織 「対応がバラバラで連携が取れていない」 「同じ施設の内でも対応に差がある」
	④援助内容 「レクやリハビリをやる人とやらない人の差」 「重度の人に対応できていない」

図6 実習全体で最も苦労したことについて

カテゴリ	主な発言内容
1：ケアプラン 作成に関係 すること	①ケアプラン実施 「本人をやる気にさせること」 「ケアプランの実施」 「中途半端に終わってしまった」 「利用者の拒否」 「自立を支援しようとしても本人に拒否されてしまう」
	②ニーズの把握 「本人の気持ちと自分が必要だと思うことにズレがある」 「こうあって欲しい、という自分の思いと本人の拒否」
	③利用者・職員 との関係形成 「利用者の気分の変化」 「どう関わればいいのか」 「利用者が昼夜逆転で関わる時間が作れない」 「職員との関係が出来るまでが辛い」 「利用者・職員双方と関係を作ること」
	④実習生として の立ち位置 「職員のように動いてしまい、アセスメントの時間が取れない」

また、前回実習においては自分の生活感覚とのズレ、いわば自分個人の生活実感とのズレに関する事柄や、実習前に漠然とイメージしていた事との差異を表出する表現が多く見られたが、今回はケアをする立場から、実習生なりの理想とするケア観が育ち、現実のケア場面とのズレを認識しつつあることが想像される。

4) 実習全体で最も苦労したことについて

本項目は昨年度の調査項目にはなかった質問であるが、「辛い」や「ショック」などの受け身的なニュアンスと比較して、「苦労した」については自らを行動主体とする観点からの回答を期待して質問に加えた。ケアプラン作成に関係することに表出が集中し、図6の「ケアプランに関すること」という大カテゴリと4つのサブカテゴリが見いだされた。本実習の全員共通の目標である「ケアプラン作成に関すること」にエネルギーが注がれ、一人の人と向き合い、ケアプランを作成する目的のもとにコミュニケーションをとり、関係を作ってきたことがうかがえる。介護技術を習得する、コミュニケーションをとる、という行為そのものが目的ではなく、アセスメントのためやケアプラン実施のための意図的な関わりを試みていることがわかる。

5) 実習前に想像していたよりも良かったこと

図7の4つのカテゴリが見いだされた。実習Iにおいては実習生としての自分が施設や利用者からどのように受け入れられるのかを自分が作ったイメージと比較して回答する形が多かったが、今回の回答は自分と実習先との関係をはなれて、主体的な立場から「観察する」形での

図7 実習前に想像していたよりも良かったこと

①職員	「職種間の連携がある」 「各専門職が一体となって一人の利用者をサポートしていた」 「一つ一つの介護技術のポイントを全部教えてくれた」
②ケアの 中身	「体に優しい介護方法が職場内で統一されていた」 「車イスやトランスポードなどが整っていて活用されていた」 「二人介助が重視されていて事故がないように配慮されていた」
③自分自身	「自分の適応能力が高いことが分かった」 「成長したと思う」
④利用者	「コミュニケーションがとれる」 「利用者さんの全てをひっくるめて愛しているって思えた」

回答が増加している。具体的には実習Ⅰでの「施設・職員の雰囲気」というカテゴリが、雰囲気という抽象的なものからより具体的にケアの中身に関する表出へと発展したことがうかがえる。

3.1.3 グループインタビューの考察

実習Ⅰでの質問項目と一部が異なるため単純な比較が出来ない部分もあるが、全体として表出内容に大きな変化が見られる。学生たちのみならず本学としても初めて送り出す実習であった前回は、見るもの聞くもの全てが初めてであり、参考になる先輩もいない状態で実習先の環境に適応し、職員・利用者との人間関係を構築する事そのもので大きなエネルギーを費やしていた。表出される内容も「見学者」的な傾向が強く、生じている出来事の表面に反応し、「感じる」「思う」レベルにとどまっていた。それに対して今回のインタビュー結果からは自らが行動の主体となり、考え、実施している様子がうかがえ、学生たちが向き合った事柄を感じるだけでなく、体験を深めて自分なりの解釈や考察まで行っている。その変化の要因としては「最も苦労したこと」で表出されている内容がケアプラン作成に関する集中していることから、一人の利用者と密に接し、ケアプランを作成するという実習目標が大きく影響していると考えられる。4週間という期間は、実習先に馴染み、担当利用者を決め、アセスメントを行い、プランを作成し実施する、という一連の過程を学生が行うには短すぎるのではないかと教員も危惧し、実習指導者からも実施までは難しいのではないかという意見を頂いた。しかしインタビュー結果からはケアプラン立案だけでなく実施まで目指したことによって、一つ一つの行為がプランにつながっていくことを意識し、ただ単に会話をする、ただ単に介護技術を実施するのではなくそれぞれの行為の意図を意識して実施していることがうかがえる。ケアプランを立てる事そのものも実習の大きな目的ではあるが、学生たちにとって、プランを立てるために、また実施するために意図的に関係を作り、会話をし、介護技術を実施すること

が非常に重要な学びの指針となっていると考えられる。

3.2 質問紙調査

3.2.1 質問紙調査概要

目的：グループインタビューについては学生自身の言葉を重視し、生の言葉を拾い上げることに主眼をおいたが、質問紙については前回の実習Ⅰと比較しての変化をデータ化することを目的とした。

対象及び回収率：「介護実習Ⅱ」を実施した山梨県立大学介護福祉課程に在籍する3年生(20名)に調査票を配布し、20名全員から回答を得た。

調査方法：質問紙による無記名方式で実施し、記入後所定の場所で回収を行った。

調査時期：グループインタビューと同じく実習10日後

図8 質問紙における質問項目

1) 今回の実習で最も辛かったのは何日目ですか？ (日数記入)
2-1) 今回の実習は ①前回より辛かった ②前回同様辛かった ③前回より楽だった ④前回同様楽だった
2-2) その理由や原因をどのように自己分析しますか? ①実習先の雰囲気 ②施設スタッフからの働きかけ ③自分自身の力 ④自分自身のモチベーション ⑤実習目標 ⑥その他（自由記述）
3-1) 今回の実習は ①前回より余裕があった ②前回同様余裕があった ③前回より余裕がなかった ④前回同様余裕がなかった
3-2) その理由や原因をどのように自己分析しますか? ①実習先の雰囲気 ②施設スタッフからの働きかけ ③自分自身の力 ④自分自身のモチベーション ⑤実習目標 ⑥その他（自由記述）
4-1) 今回の実習は ①前回より楽しかった ②前回同様楽しかった ③前回よりも楽しくなかった ④前回同様楽しくなかった
4-2) その理由や原因をどのように自己分析しますか? ①実習先の雰囲気 ②施設スタッフからの働きかけ ③自分自身の力 ④自分自身のモチベーション ⑤実習目標 ⑥その他（自由記述）

- 5) 今回の実習においてもっともエネルギーを費やしたのはどんな事についてですか？
- ①施設スタッフとの関係形成
 - ②利用者との関係形成 ③アセスメント
 - ④ケアプラン作成 ⑤モチベーションの維持
 - ⑥その他（自由記述）
- 6) 昨年の実習Ⅰと比較して、自分自身が成長したと感じる変化を教えて下さい
- ①知識がついた ②ケア技術が身に付いた
 - ③コミュニケーション技術が身に付いた
 - ④施設スタッフとの関係形成がうまくなかった
 - ⑤利用者との関係形成がうまくなかった
 - ⑥記録記入がうまくなかった
 - ⑦成長を感じられなかった ⑧その他（自由記述）
- 7) 本実習前に行った準備において、最も有効だと感じたのはどんな内容ですか？
- ①実習施設の下調べ ②実習計画書の作成
 - ③オリエンテーション実習 ④ケアプラン作成演習
 - ⑤その他（自由記述）
- 8) 今回の実習先を選ぶに当たって最も重視したことはなんですか？
- ①実習先の種別
 - ②実習先の立地（自宅からの距離・交通手段等）
 - ③就職との関連 ④自分自身のテーマ
 - ⑤その他（自由記述）
- 9-1) 夕方からの介護実習室開放を利用しましたか？（回数も記入して下さい）
- ①（ ）回利用した ②利用しなかった
- 9-2) 役に立つ点はありましたか？（9-1で①を選択した者への質問）
- ①なかった ②気分転換・ストレス発散
 - ③ケアプランに関する指導・アドバイス ④情報収集
 - ⑤学生同士の情報交換 ⑥その他（自由記述）
- 9-3) 利用しなかった理由を教えて下さい（9-1で②を選択した者への質問）
- ①遠い ②疲れている ③必要性がない
 - ④時間がない ⑤その他（自由記述）
- 10) 実習室開放を利用すると仮定して、あなたが望む内容はなんですか？
- ①参考図書などの資料提供
 - ②ケアプランに関する指導・アドバイス
 - ③ケア技術の練習の場 ④学生同士の情報交換
 - ⑤その他（自由記述）
- 11) 今回の実習を終了して、これからの自分に何が必要だと感じましたか？
- ①福祉に関する知識（制度・施策）
 - ②医療に関する知識 ③ケア技術
 - ④コミュニケーション能力・技術
 - ⑤今までやっていける ⑥その他（自由記述）
- 12) 実習に関連する事柄（実習先・実習指導の授業・実習巡回・実習室開放など）について要望があれば具体的に教えて下さい（自由記述）

1) 今回の実習で最も辛かったのは何日目か？

質問1) 結果：図9

2006年の実習Ⅰは11日間であり、2007年の実習Ⅱは20日間と実習日数に違いがあるが、13名中9名が3日目までと回答した実習Ⅰの調査結果と比較して、実習Ⅱの回答は幅広く分散した結果となった。これは、実習Ⅰにおいては実習先への適応が学生に共通する課題であったのに対して、実習Ⅱにおいては学生個々の課題が生じ、「辛い」と感じる時期に幅が出てきていると考えられる。

2) 前回実習との比較

質問2)～4) 結果：図10～18

「辛さ」「余裕」「楽しさ」の3つの観点から質問を行った。辛さの観点では45パーセントが「辛かった」としている一方で「余裕」「楽しさ」では7割以上が肯定的な回答を行っている。このことは辛いと感じる状況があったとしても、実習を楽しむゆとりを多くの学生たちが持っていた、ということである。

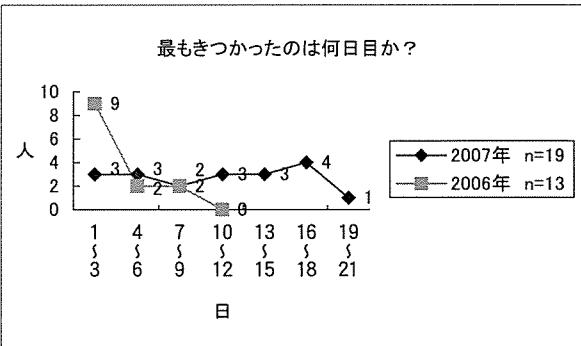


図9

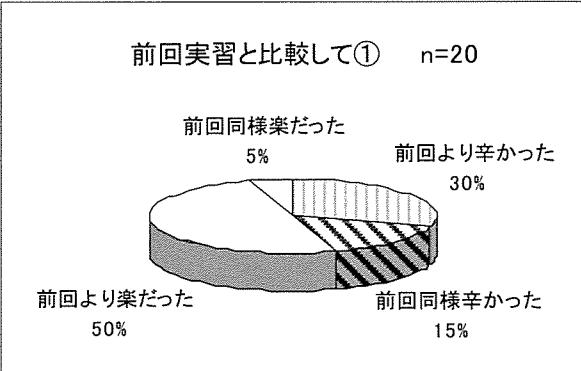


図10

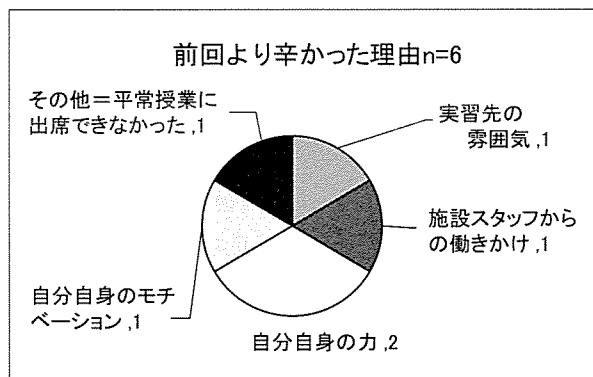


図 11

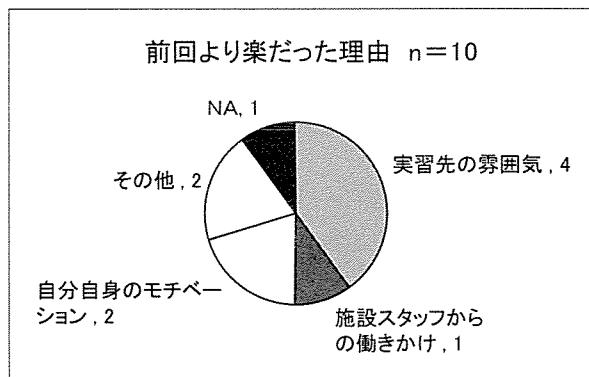


図 12

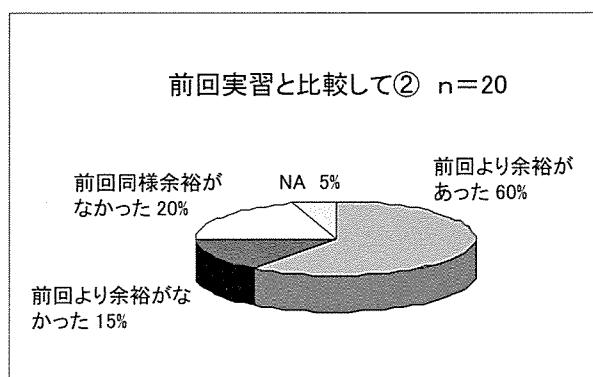


図 13

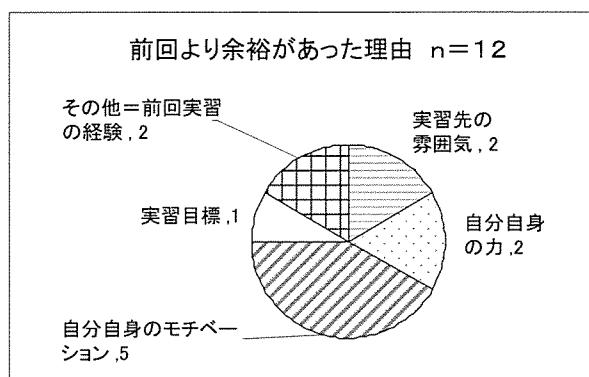


図 14

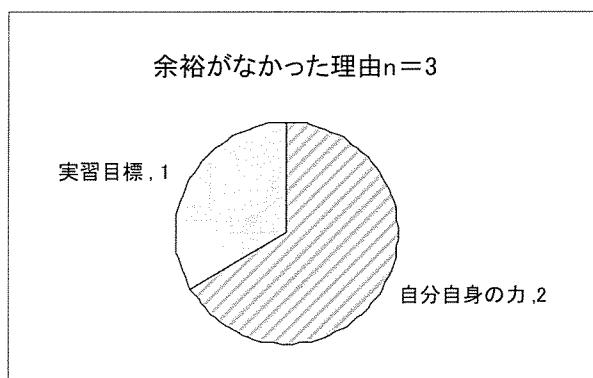


図 15

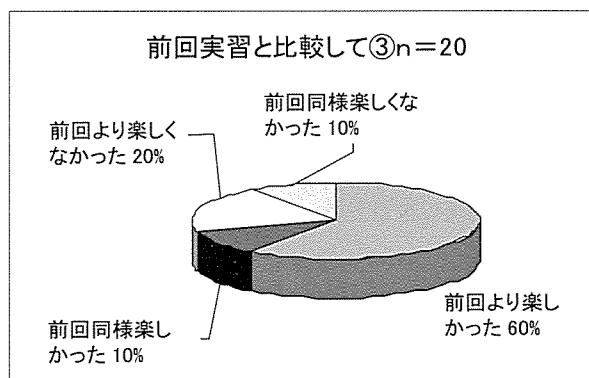


図 16

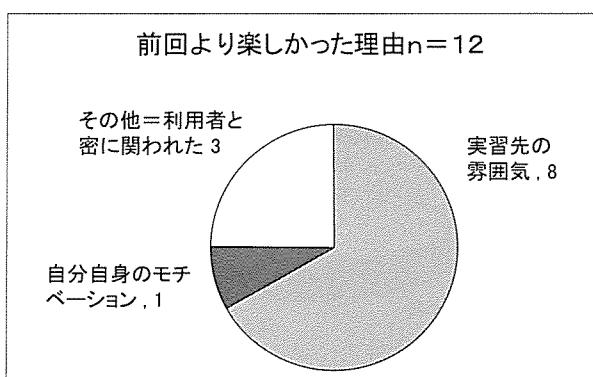


図 17

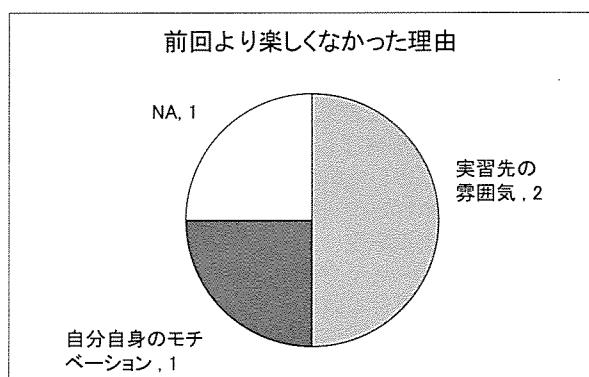


図 18

3) 今回の実習においてもっともエネルギーを費やしたこと

質問5) 結果: 図19

前回調査では全体に、職員からプラス・マイナス両面のショックを受けていることが示唆されたが、この質問項目においてはスタッフとの関係形成をあげた学生は大幅に減少し、利用者との関係形成に力を注いでいる結果となっている。ケアプランを作成することが大きな目標となっている実習であるためアセスメントやケアプラン作成の前提として、担当利用者との関係形成が大きな比重を占めていると考えられる。

4) 成長したと感じる点

質問6) 結果: 図20

選択肢には「成長を感じられなかった」というマイナス評価の項目も含まれているが、ほぼ全員が自らの成長をケア実践などの形で実感している結果となった。一方でグループインタビューでは、実践する際に強く職員の目を意識している結果も表出されており、見学する存在であった前回

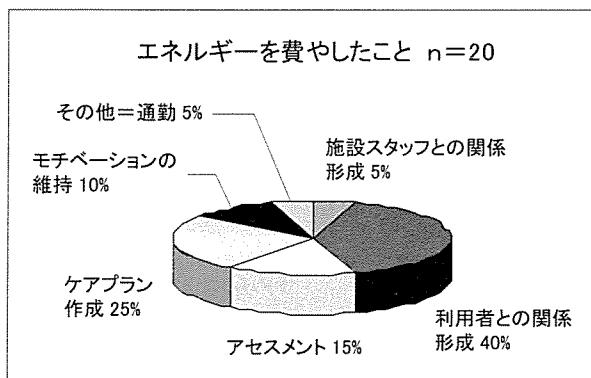


図19

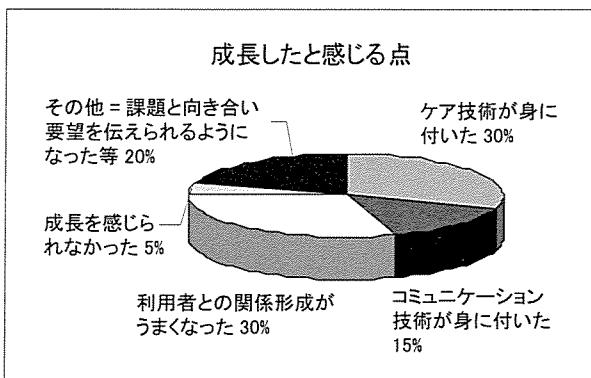


図20

実習から、自らが実践主体となり主体的に利用者と対峙しているものの、同時に自らを擬似的な職員とみなしおり、職場文化の中でどのように評価されるかを気にしている側面を感じられる。

5) 実習前準備で有効だったこと

質問7) 結果: 図21

過半数の学生が「ケアプラン作成演習」について有効だったと回答した。実習前指導の段階で今回の実習目標がケアプラン作成であることを繰り返し提示し、講義においても実際のアセスメント書式を用いての演習を実施した効果と考えられる。また同時に、ケアプラン作成演習が実習への意識を高めたとも考えられる。「実習計画の作成」については、各自が実習計画書を作成することにより実習前に、自分は何をするのか、何のために実習に赴くのか、が明確化され整理されたことが、有効性の評価につながったと考えられる。

6) 実習先選択で重視したこと

質問8) 結果: 図22

実習先決定時期が2学年末であることが影響してか、就職や自分自身のテーマで選択したとする回答よりも実習先の種別を重視したとする結果となった。また、目前の交通手段を持たない学生にとっては、実習先までの交通の便は非常に大きい影響を及ぼしている。通いやすい立地の施設については本学のみならず他学の学生も集中する傾向があり、学内での調整のみならず、県内養成校間で実習時期をずらす等慎重な実習先調整が必要となる。今後2学年が同時期

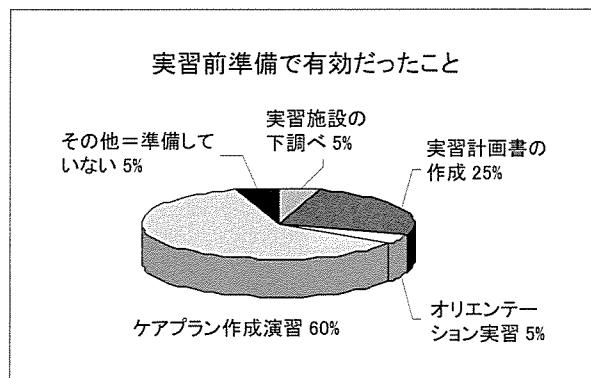


図21

に実習を行うこととなり、40名分の調整は困難を伴うと予測され、新たな実習先を加えていく等の実習環境の整備も継続しなくてはならない。実習先選択の面接は一人30分程度を費やしているが、この段階で自分自身の興味関心を具体化し、実習先と結びつけるには教員側の密なサ

ポートが必要となる。十分な面接時間を確保するためには、面接時期等も年間授業計画に織り込み、計画的に実習準備を進める必要がある。

7) 実習室解放に関して

質問9)～10) 結果：図23～26

実習室解放とは、教員による週二回の実習巡回だけではサポートが不足すると予測し、実習期間中の18～21時の間介護実習室を開放し、主にリフレッシュを目的とし、必要に応じてケアプラン作成指導や介護技術指導も行うことを見定して常時教員1名以上が対応する取り組みである。4週間の期間中8割の学生が利用し、過半数の学生が週一回以上利用する結果となった。学生が感じた利点としてはケアプラン作成指導が最も多く、リフレッシュを上回る結果となった。また、希望する内容についてもケアプラン作成指導への希望が多く、巡回時の指導では不安を感じている様子がうかがえる。教

実習先選択で重視したこと

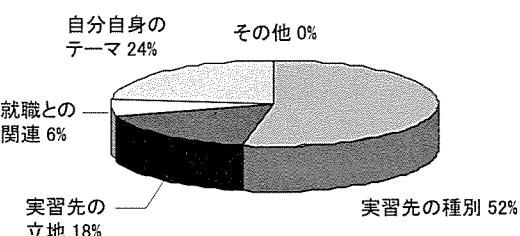


図22

実習室解放の利用回数

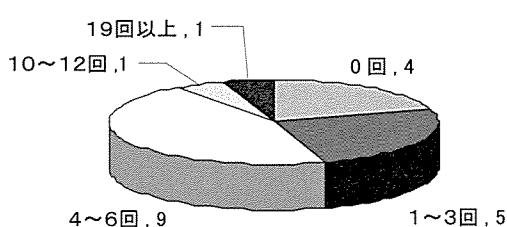


図23

実習室解放の役に立った点

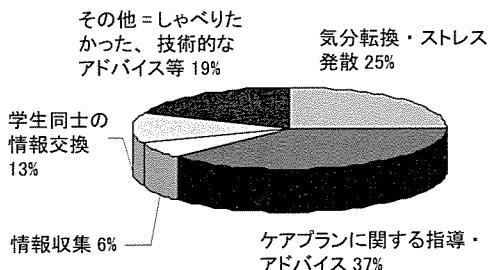


図24

実習室解放を利用しなかった理由 n=4

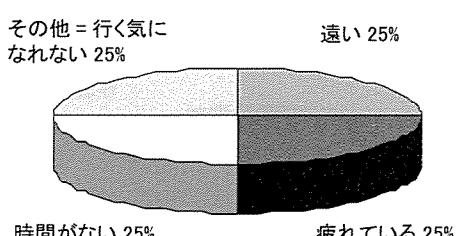


図25

実習室解放に望む内容

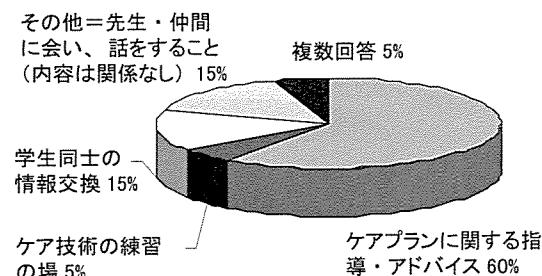


図26

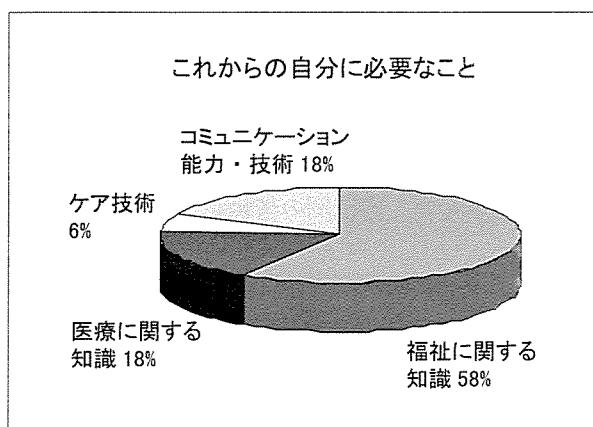


図 27

員側から見た利点は、アセスメントが不十分な部分の指摘や、利用者理解のための書籍・資料の提供ができること、巡回担当以外の学生の状況が把握でき、教員間の情報共有が円滑になったこと、等である。一方で、利用していない学生に対するアウトリーチについては、多くの学生が実習室解放を利用し利点をあげていることから、利用していない・出来ない学生についても、巡回時の指導時間を長めにとるなどの何らかの対応が必要であると考えられる。

8) これから自分のために必要なこと

質問11) 結果: 図 27

福祉に関する知識・医療に関する知識が合計で 76% と高い比率を示した。技術的な部分以前にまず知識が必要だと考えていることは興味深いが、これが介護実習生全般に共通する傾向なのか、看護など他分野での実習においても同様なのか、また 4 年制大学であることが影響しているのか、現段階では判断の材料がない。今後、第一段階終了時にも同様の質問を行うことで実習段階別の意識傾向と、近接領域における傾向もあわせて分析を行いたい。また、実際の指導に反映させるために「知識」が指す内容について具体的に明らかにしていきたい。

4. 考察

グループインタビューと質問紙調査から、図 28 のようにそれぞれの段階に応じた実習指導方法が考えられる。

図 28

	第一段階実習	第二段階実習
学生の立ち位置	見学者的（見て、聞いて、感じる）	実践的（考え、働きかけ、感じる）
留意点	学生の意識には実習=介護技術の習得という図式があり、実習先の戦力になりたいという願望があること	アセスメントやケアプランの立案には対象者に関する知識や制度施策に関する知識が必須であること
実習の主眼	利用者や職員とじっくりと向き合いコミュニケーションをとること、出来るだけ多くの利用者・職員と関係形成をおこなうこと	ケアプランの作成・実施を通じて意図をもって利用者と関わること、体験だけでなく自ら行う行為も重視すること
事前指導	利用者・職員との関係形成に必要となるコミュニケーション演習を重視し、実習で遭遇する場面を想定したコミュニケーション訓練を実施する	アセスメントからケアプラン作成に至る一連の介護課程の展開演習に十分時間を割き、事前に事例を通じたケアプランの作成体験を積む
	実習目的を学生が明確に理解できるように指導を行うと同時に、実習施設と教員が目的を共有し何をどこまで指導するかを事前に協議し実施プランを共同で作成しておく	
実習中指導	実習の初期段階（1～3日目）への配慮が特に必要。学生が受けたりアリティショックを意識化させ、ショックをうけた場面を活用して教育効果をたかめる	ケアプラン作成に関する具体的なアドバイスと指示が必要。単なる体験に終始しないよう、ケアプラン作成を意図したかかわりが持てるように促す
実習後指導	アリティショックを單なるショック体験で終わらせないための実習後の指導が非常に重要になる。実習の振り返り、実習後指導においては個々の学生が受けたりアリティショックを振り返り掘り下げ、実習報告書という形で言語化を完成させる事を目指す	プラン作成の前提となる知識と、プラン実施の前提となる介護技術を身に付ける必要性とを認識させ、断片的な知識や経験を統合化し、援助行為に結びつけることを目指す作成プランを分析・評価し、援助者としての関わり方を検証する

5. 本研究の限界と今後の課題

前回調査と同様、一大学の少数の学生を対象にした調査であり、結果を即一般化して考えることはできないし、学内での教育にどう反映させるかを考えるには継続的に学生の声を拾い、学生の傾向をつかむ必要がある。また、介護福祉士養成カリキュラムの大幅変更が目前に迫っており新カリキュラムに対応する形での実習のあり方については今後の重要な課題である。

6. 謝辞

研究趣旨を理解し、時間を割いて協力してくれた学生諸君に心から感謝を申し上げます。また、実習に際して学生たちのよき役割モデルとなって頂いている実習先各機関の皆様にも厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 伊藤健次： 介護実習におけるリアリティショックー その様相と肯定的側面について－ 山梨県立大学人間福祉学部紀要 第2号 11-18頁

Consideration Concerning the Way of Instruction for Students Corresponding to Training Stage

ITO Kenji

Abstract

I have analyzed and considered care training II (the second time care training in this university) comparing the first time training. As a result of the survey with questionnaire based on the comparative analysis of the group interviews which was conducted after care training I and II, it was revealed that the goal to make and conduct care plan influenced the whole training so much and showed that students were trying to take part in the training with apparent intent. It was also found that the way of instruction for students applied to each training I and II.

Key words : care worker training, training stage, the way of instruction for students, reality shock